

講評文

12月27日 2番目
名城大学附属高校

「The elephant in the room」

体育館を焼失した高校で、屋外での活動を強いられる演劇部。その姿が世間に報じられると、代わりにダンス部が活動場所を追い出された。しかし、反感を抱いたバスケット部や卓球部との間でテロの応酬が始まり、「運動部」は「文化部」から壁に閉じ込められる。その様子は、「ユダヤ人」によって、パレスチナに住む「アラブ人」が弾圧されている姿と同じであり、自分事としてとらえることが難しい問題が、高校生の観客にもはっきりと伝わる作品となっていた。

本作はイスラエル・パレスチナ問題が、部活動という日常生活の問題に置き換えて表現されているのが特徴である。ユダヤ人は演劇部に、アラブ人は運動部に喩えられており、バスケット部が演劇部にボールを投げたのは、第一次中東戦争を表しているのではないかという意見もあった。また、演劇部顧問の「誰もいないんじゃないか、人間は。」という発言は、情報を与えられているにもかかわらず、パレスチナの現状から目を背け、見て見ぬふりをする世の中の認識を表現しているのではないかと考える委員もいた。このように、観る者の想像を掻き立て、考えさせずにはられない作品であった。

舞台美術においても、イスラエル・パレスチナ問題と部活動のそれぞれの観点で捉えられる表現がされていた。卓球部顧問の授業では、地明かりが広く点いていたのに対し、演劇部顧問の授業では顧問のみが照らされていた。このことは、自分の見たいものだけに目を向ける我々の心理を表現しているのではないかという考えもあった。加えて、火災の場面と爆撃の場面で、同じ環境音が使用されており、この劇が戦争のメタファーであったことは、はじめから表現されていたのではないかという意見も出た。

劇全体を通して、世界で戦争が起きているという向き合いたくない現実を、否が応でも直視させるという本作の意志を感じさせる要素がいくつかある。例えば、「これは、本当の話」というフレーズは劇中で多数登場する。このように、キーワードを反復することで、観客に現実をつきつけるような効果が生じたのではないかと考えられた。また、劇中では歴史総合の授業で、イギリスの三枚舌外交が扱われるという場面がある。このような、観客にこのストーリーが何の比喩であるか、を悟らせる場面をはさむことで、より作品の世界観に引き込まれていくように感じた。

この度の上演を通して、相手が傷ついていると気づいても、自分の利益を優先してしまう人間の怖さを実感するとともに、その事実を見て見ぬふりをし、歴史を繰り返している愚かさをも突きつけられた。最後にスマの言う「もっとずっと、前から」という言葉は、我々の認識を改める必要性を感じさせるものだった。